

終わりになき世界

大村伸一

あるようでありないようでもある。

あるようでもありと思うのは、同じようなことがあるいはまったく同じことが昔あったような気がするからです。ないようでもあると思うのは、その記憶が必ずしもはっきりとはしないからです。

同じことが以前あったというよりは、同じ事が幾度も繰り返されていたような印象は確かにあるのです。それでもそれが確かなことのような気はしません。だからというわけではないのですが、いえ、やはりだからなのかもしれませんが、これから私の申し述べる事柄はたぶん何一つ真実ではないのでしょうか。真実ではないというよりもおそらくは偽りなのだと私は思っています。私にはそれが真実なのか偽りなのかを詳らかにすることはできないのでしょうかけれど、だとしてもいずれ、それが真実ではないということを誰かが証明してくれるだろうと信じています。誰も証明しようとはしないかも知れません。証明すべき価値のある命題は他にも数多くあるのですから、こんなことを証明しようというのはよほどの物好きというものでしょう。勿論、だからと言って、証明がないからといって、偽りではないということではありません。誰も証明しないという事実が、かえってこれから申し述べるあれこれは真実でなく偽りであると、明らかにしているのではないかとすら思えてきます。

確かに、以前、あったことのように思うのです。ずいぶん昔に他の誰かがそう話していたのを聞いた事があります。読んだだけかもしれませんが。もしかすると他の誰かなどではなく、私自身がそう書いていたのかもしれないとも思います。書いていたら書いたものがどこかに残っているはずですが見つけれないということは、書いたものを読んだというよりは、昔、私がそう考えたことがあるだけで、考えたことの記憶がまだ残っているということなのではないでしょうか。それとも、考えたことを忘れた記憶が残っているというべきなのかもしれません。

いずれにせよ、そういった記憶は、思い出そうとしても細部があいまいで、まるでそんなことなどなかったかのようにしか思い出せないのです。だとすると、何か特定の記憶があいまいになるようなことが起きているのかもしれませんが。勿論、思い出せることは望むまま詳細に思い出すことができます。それは確かです。ですから、特定の記憶だけがあいまいになるようなことが起きているのではないかと思うのです。

既存未在と名付けられています。「きぞんみざい」と読むべきなのか「すでありみあり」と読むべきなのかは読むものに委ねられています。この四つの文字が選択されたそのことに何か理由があるのでしょうか。それぞれの文字が想起させる意味合いは、名付けられているものに対する印象に影響があると思います。しかもその印象は名付けられたものの本性と裏腹であるかもしれません。勿論、その印象が名付けられたものの本性を正確に表している可能性もあります。要約すれば、名前の印象と名付けられたものの本性の間にある関係は偶然によって定められたものであるとしか言えません。確かなことは、名前を信じてはならないということなのではないでしょうか。そも

そも誰が名前を信じるというのでしょうか。もしも誰か名前を信じる者がいたとしたら、それは私くらいかもしれません。そして、私は既存未在と書かれます。だからこそ名前を信じていると考えられているのでしょう。

文字が薄汚れていることにも注意しています。長い間使われ続けていたために汚れてしまい、文字とその意味はあいまいです。いや、あいまいであるというより、文字に意味などあるのでしょうか。文字に意味などないとそう感じるのは、もともと文字に意味などなかったからとも思えますが、実はもともとは意味があったにもかかわらず、次第にその意味があいまいになりすぎているからなのでしょう。なぜ、名前が文字によって示されているのか、それにさえ理由があったようにも思いますが、思い出せません。おそらく重要な事柄ではないのでしょう。

文字を教えてくれたもののことは覚えていません。まるで、文字をひとつ覚えることと引き換えに文字を教えてくれた誰かをひとりずつ忘れてきたかのようです。ともすれば、文字のことは初めから知っていたように思ってしまうのですが、それがありえないことも承知していないわけではないのです。そもそも、文字を教えてくれた者が言葉を教えてくれたわけではありませんでした。文字は教えられるけれど、言葉は教えられないと誰かが言っていたような気がします。自分勝手に作ってよいとさえ指示されていました。自分勝手に作ることが許されていると誰かが伝えに来たのでしょうか。入り口に申し訳なさそうに立っているその人の姿を思い出さうです。その人が文字を教えてくれたわけではないでしょう。言葉の係だと自己紹介したその人は、だからといって言葉を教えるわけではないのだと言い、少し悔しそうに青ざめた顔をしていました。ずいぶんたってから、そもそも言葉は教えられるものではないのだと、打ち明けてくれました。何かの中の意味の触媒のようなものが足りないのだとも言いました。その言葉こそ意味を伴っていなかったのではないかと今では思います。それにどうやって言葉を作るのかさえ教える余裕がなかったようです。確かに言葉の作り方は自分で考えることになっています。そのことさえ、教えられたわけではありません。教えられたという記憶はありません。言葉を作る時、その意味をどうするかまで考えていなければ、やっかいなことになります。それはご覧の通りです。

はじめは誰もが物語を作りました。そのほうがよいと思い込んでいたのです。言葉というものが何であるのかを少しも理解していなかったのです。こう書くとまるで私が言葉というものが何であるのかを理解しているかのようですが、勿論、そんなことはありません。そもそも言葉を書くということは、言葉に従属しているということです。そして、言葉の支配下にある者には言葉を理解することなどできるわけがないのです。それが物事の道理ではないのでしょうか。それでもそんなことには気づきもせず、誰もが自分は物語を作ったと思い込んでいたのです。幅薄丈長は物語を名詞で埋め尽くし多くの称賛を得ましたし、減多少増は誰も読んだことのないような飾る言葉を溢れさせてそれまでにないほど大勢を喜ばせましたし、ごく少数の動詞を図形のように組み合わせその貧弱な言葉に鮮やかな可能性を示した者さえもいました。それが、そのすべてが、何一つ価値などなかったということがいずれ明らかになるなど誰も空想さえしませんでした。勿論、価値など誰も気にしてはいなかったのですから、価値がないのだと言われても、何も変わりはありませんでした。

少し前に物語を作ると書きましたが、物語は作ることなどできるようなものではないこともご存知のことと思います。物語は与えられるものですし、そもそも物語とは存在しないからこそ物語と呼ばれるのでした。幅薄丈長はそのことに気づいていたのかもしれませんが。ある時期を過ぎた頃から、誰も知らない名詞を使い始めた頃から、幅薄はぼんやりとして誰かに声をかけられても何も返事をしなくなっていました。物語に取り憑かれたのだと面積拡大は指摘しましたが、そ

これは神秘主義に他ならないと、おそらくそれは否定だったので、そのように否定されてからは何も言わなくなりました。何者かが面積拡大のことを神秘主義だと批判していたのです。否定したのは幅薄ではなくその取り巻き達でした。その頃になると、幅薄自身はもう物語を作ることはせず、もっぱら、物型であったり、忽言であったりの断片を見せるだけでしたので、幅薄がどう思っていたのかまでは分かりません。そもそも、それら断片も幅薄が書いたものではなく、取り巻きが捏造しただけなのではないと言われていました。取り巻きというのは、原点反復や微少拡大たちのことです。他にもいたようですが、知られているのはこの二人だけでした。そういえば、高低中点というものがいたような気がします。いなかったのかもしれませんが、案外、原点反復や微少拡大、それに高低中点は、幅薄が作り出した登場人物に過ぎなかったような気さえます。ただの登場人物だったのだと言われれば、そうなのだろうと思わなくもないからです。いずれにせよ、幅薄が何も発表しなくなったので、名詞主義は忘れられてしまいました。名詞主義というのは、幅薄丈長の書いた物語に付けられた符丁です。取り巻き達がそれを気に入っていたのかどうかは分かりませんし、そんなことは誰も知りたいたとも思いませんでした。それというのは名詞主義という言葉であり、そんなことというのは取り巻き達が名詞主義という言葉を入っていたかどうかということです。

幅薄丈長の作り上げた物語は、初めは大層称賛されました。見たことや聞いたことのある名詞には興味を惹かれるものです。それが、やがて誰も読んだことのない名詞が登場するようになると疑われ始めたのです。つまり、大煙や誤正南などという言葉が何か裏切り者であるとか判定試験であるとかの意味で使われたときには、疑うものはほとんどいませんでした。辞書にない言葉などありふれていますからね。やがて、発火幕が損害賠償であるとか表示装置というような意味の言葉の代わりに頻繁に使われ始め、ついにどのような意味であるかも分からないような言葉として腹西空軟石が登場したときには、取り巻き以外のすべての者が幅薄丈長を無視するようになったのです。その話を聞いた人たちは揃ってそんなこともあるだろうと答えたものです。その話というのは、取り巻きが無視するようになったという話のことです。そうです、そもそも、名詞とはそういうものではないのでしょうか。

そのような物語の多くは文法カフェでおこなわれました。この頃では見かけませんが、その当時、文法カフェはいたるところにあり、物語を求める者は物語を見つけるのに苦労しませんでした。もっとも、誰であれ自分が求めている物語はそうそう簡単には見つからなかったようです。そして、角隅中心はカフェに入るたびに、薄ら寒く感じるのです。それはおそらく、店の中のテーブルや椅子がすべて灰色に見えるからでしょう。

「寒くないか」

角隅がそう言うと、テーブルの向かい側に座っている間隔長辺が長く灰色の指を上に向けました。天井の灯りが灰色の光だからだと言う意味です。

「文法には色など必要ない」

間隔は声には出さずに口の形だけでそう言いました。それは誰の言葉でしょうか。角隅がそう考えながらカップを手にとるとすでに冷たくなっています。灰色の飲み物は急速に冷えてゆくので注文したコーヒーはテーブルに置かれたあと、すぐに何か白っぽい色のゼリーに変わってしまいました。三人は間違えて無色派の店に足を踏み込んでしまったのでしょうか。外からは店が無色派なのかそうでないのかは分かりません。それからしばらく幅薄丈長の最近の物語を読みましたが、途中まで読んだところで物語を放り出し、繰越大量が投げやりに言います。繰越、間隔、角隅の三名と一緒に文法カフェを訪れていたのです。

「さまけし名詞のくりたまし滅亡である」

これは、ずいぶん以前の過復常久の発言です。係結びが無駄ですが、それを除けば、名詞の滅亡だと言っているのは分かりました。

「過復常久の言葉を引用するとは文字が汚れるぞ」

間隔は読んでいた物語を中断しそう言いました。角隅には文字が汚れるという意味がよくわからなかったのですが、ついうなづいてしまいました。

「確かに、滅多少増を賞賛するような奴の言葉は信用ならん。しかし、幅薄丈長の物語に関する批判は正鵠を射ていると思わんかね」

繰越は、こんなことも分からないのかという高慢さと、それでも同意が欲しいという卑屈さを交えてこう答えます。

「これを名詞の滅亡だと言う者は、本当の名詞の滅亡を知らないのだ」

「幅薄丈長の物語が名詞の滅亡でなければ、世の中にはもう名詞は存在しないぞ」

「滅多少増でも幅薄の係結びは判別できないだろう」

「そもそも幅薄などという者は存在するのかね」

「名詞は不滅である」

最初の発言から、間隔、繰越、間隔、角隅、間隔の順番です。あるいは、間隔、繰越、角隅、角隅かもしれません。おそらく、繰越、間隔、繰越、角隅ではないでしょう。大胆な想像ですが、実はすべての発言が滅多少増であったということもありそうです。こういったことのすべては文法カフェでは発言者が誰なのか分からないように灰色の室内灯が点けられているためにおこります。

それから、修飾語のせいなのか助詞のせいなのかは分かりませんが、三名は足元をふらつかせながら文法カフェの門を抜けまっすぐに進みました。三名ではなく四名であったりそれ以下あるいはそれ以上であったりしたかもしれません。はっきりと分からないのは、それが国道だったからなのでしょう。道をしばらく進むと国道の標識のあったあたりには、薄いベニア板に殴り書きで国語と書かれた標識があるばかりです。だとするとそれは国道ではなかったのかもしれませんが、勿論、国道でなかったとしても、文法カフェを出た後に行く場所など他になく、迷うはずもありませんでしたし、迷っても同じ場所にたどり着いたでしょう。道というものは迷わないようにできているというのは幅薄丈長が誰にでも分かる言葉を使わなくなる直前の言葉です。おそらく必ず迷う道は道ではないという意味でしょう。だとするとその道は国道どころか道路ですらなかったのかもしれませんが、それとも、迷っても結局同じ場所に辿りつくのであれば、やはり道なのでしょう。そもそも幅薄丈長が真実を述べていたのかどうかも判然としないのであれば、道なのか道でないのかは判別しようもありません。とはいえ、その道では誰もが同じ場所にたどり着きましたし、もしも道でなければそもそも道に迷うことすらできなかったでしょう。

どこかで決まった時刻が来れば、町中の文法カフェの扉が一斉に開き客が皆国道に繰り出します。そしてその時間が訪れていたのも、間隔、繰越、角隅の三名は行列から外れないようにゆっくりと歩いて行きました。日によって、靴を履いて歩いたり、両手それぞれにぶらさげ裸足で歩いたりしました。どちらにしても同じでした。靴を履いていても手にぶらさげていても、何も変わることはなかったという意味です。それにしてもこの頃では文法カフェはどこにも見つかりません。それはいたって残念なことです。

「まだかな」

と、最初に言い始めるのはいつも決まって間隔長辺でした。

「もうすぐだよ」

答えるのは、繰越大量です。

「こなければよかった」

後悔を口にするのは角隅中心の役割のようです。

「あそこにはいられないよ」

「あそこってどこだったっけ」

「ほら、見えてきた」

「あれは誰かの影だ」

「どこだっけ」

「こなければよかった」

「俺のだ」

「もうすぐだよ」

「まだかな」

これらの言葉は、間隔、繰越、角隅、繰越、角隅、繰越、角隅、間隔、角隅、間隔、角隅、繰越、間隔の順番で語られました。それは正しくなく、本当は、間隔、繰越、角隅、繰越、繰越、繰越、角隅、間隔、角隅、繰越、繰越、間隔だと言われればそうなのかもしれません。案外、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多、減多であるとか、すべては間隔長辺の文章だったのだなどということもあったかもしれません。

それにしても、ここまで書いてきたことはすべて、おそらく文法上の架空の言葉ではないでしょうか。というのも、あれほど人気のあった文法カフェが、今ごろでは、どこにも見かけなくなっただからです。それだけが残念でなりません。